

『歴史認識問題研究』第2号を出すことができた。年2回発行という当初の方針を守ることができほっとしている。今号では2つの特集を組んだ。「特集1：ユネスコ「世界の記憶」慰安婦登録、見送られる！」と「特集2：徴用工問題」だ。

本研究会は一昨年の発足以来、ユネスコ「世界の記憶」慰安婦資料登録阻止問題に精力的に取り組んできた。創刊号でも高橋史朗論文などで同問題を詳しく取り上げ、その後、東京と大阪で1回づつ同問題に関するシンポジウムを開催し、産経新聞に2回、意見広告も出した。研究会としての声明を2本出し、日本の学者100人の名前で登録に反対する声明を出すことにも尽力した。平成29年10月末、ユネスコは慰安婦資料登録を見送った。登録見送りは官民協力の成果だ。その経緯と今後の課題について高橋史朗本会副会長に資料解題形式でまとめてもらい、関係資料を掲載した。

徴用工問題に関する勝岡寛次氏作製の文献目録によると、平成12年(2000年)までにわが国で出された関連文献は470だが、そのうち「強制連行」「強制労働」と立場を異にする文献はわずか33だった。慰安婦問題については90年代激しい論争をして、強制連行、性奴隷などという極端な説をある程度論破できた。しかし、労働動員についてはまだ研究上の課題が多い。本号では、この問題の第一人者である森田芳夫の業績を利用して、強制連行説に反論した拙稿を掲載した。

また、特集以外に本研究会メンバーによる論文を4本、調査報告を1本掲載できた。高橋論文、江崎道朗論文、川久保剛論文、久野潤論文は、研究会で発表いただいたものをもとに寄稿いただいた。江崎論文、川久保論文は、本誌創刊号の「歴史認識問題とは何か」を受けて、各々の立場で議論を深めてくださった。実証研究である久野論文

は、江崎論文と合わせて読むと「ソ連・コミンテルンの反日宣伝工作」の事例研究のように読める。本研究会の成果として喜んでいる。(西岡)

本誌創刊号より、編集の実務を担当している。年2回の刊行ペースは、個人的にはかなりハードだが、第2号の刊行までどうにか辿り着き、歴認研も創設初年度のサイクルを完了したことになる。本誌が軌道に乗るまで、今後とも微力を尽したい。

本会の立ち上げのそもそもの発端となった、慰安婦資料のユネスコ「世界の記憶」登録見送り(阻止)を勝ち取ったことは、本会にとっても大きな成果であった。シンポジウムの度に、額は様々だが、当会に支援をお寄せ下さる方が多いことにも驚かされる。歴史認識問題に対する国民的関心の高さを裏書きしているが、その割には国民の声が政治や外交に十分に反映されていないことに対する、国民のフラストレーションの現れでもあるのだろう。韓国や海外に拡がる慰安婦像一つ、未だに撤去できないのを見ても、それは明らかだ。

本会はそうした多くの方々のご善意に支えられ、活動している。今後とも、一層のご理解とご支援を賜れば幸いである。(勝岡)

## 歴史認識問題研究

(年2回発行)

### 第2号(平成30年春夏号)

発行日：2018年3月15日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

頒 価：1,000円

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号

公益財団法人モラロジー研究所

歴史研究室

T e l : 04-7173-3197

F a x : 04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社